

喪服少女が異世界からくるそうですよ？

クルコイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

DbDを始めて、唐突に書きたくなりました

※超亀更新

※作者はDbD初心者

目次

きふとげーむ	15
あつぷでーと	8
ぷろろーぐ	1

ぷろろーぐ

「…う…う…う、うん…ん…ここはどこ？」

私が目覚めた場所は暗い森の中だった。

あたりを見回すと、木、木……フツク？

不気味な色合いのライトに照らされたフツクが一本だけある。

私は周りにフツク以外に何も無いことが分かったため、あきらめてそのフツクに近づく。

「これは、手紙？」

フツクには手紙が貼り付けられていた。

気になった私はその手紙を読む。

死人様

「…死人？…うつ؟!あ、頭が、痛い！」

頭の中にある記憶が思い出される。

その記憶というのは、

「そっか、私、死んだのね。」

私が死んだ記憶だった。

死因は餓死、登山に行った私は愚かにも登山ルートから外れた道を歩き、遭難。最後には助けも来ず、喉の渇き、空腹によって死んだ。

「なかなかえぐい死に方だったけど、なぜ私はこんなに平然としていられるのかしら？…手紙に何か書いているかもしれないわね。」

手紙を読むことにするのであった。

死人様へ

私はあなたの方の中では神と呼ばれている存在です。

唐突ですが、あなたは死にました。死んだときの記憶は苦しんだと

きの記憶だけなくしておきました。

これで、発狂して、精神の崩壊は免れるでしょう。

さて、話は変わりますが、苦しみの中で死んだあなたには転生という特典を付けることが決定しました。

転生先はあなたが住んでいた地球と同じですが、並行世界の地球です。

その世界はあなたが住んでいた地球と全く同じ文明があります。

しかし、少しだけ違うところがあります。

それは、特殊な能力を持つ子どもが稀に生まれるということです。それ以外はまったく同じ世界なので、安心して転生してください。

ただ、ただ転生するだけではつまらないでしょう。

ですので、転生以外にも特典を付けることにしました。

その特典というのはDead by Daylightの生存者

すべてのパーク、殺人鬼すべての見た目、パーク、固有能力、最後に相手を強制的に儀式に引き込む能力です。

存分に楽しんでください。

それでは、良き人生を

b y 神

手紙を読んだ私は頭を抱えていた。

「DbDは好きだけど、私まだ初心者殺人鬼だから！それに、現実世界で儀式やったら殺人だから！」

叫んでいた私だったが、身体が光り始め、透け始めた。

「転生するの？本当にするの？」

そんなことを言っている間にも体はどんどん透け、最後には何も残らなかつた…

???
s i d e

「…最後のひと時は楽しめましたか？」

「ああ…」

「…」

「本当に死ぬのか…」

「いやだいやだいやだ…」

この場所にいるのは四人の死刑囚と十人の係官。

四人は死刑執行を前に最後のひと時ともいえる時間を過ごしていた。

そして、執行時間が近づいてきたとき、一人の係官があることを四人に提案する。

「あなたたちはこれから死にます。」

「…これから死ぬ俺たちに向かって嫌味でもいうつもりか？」

「いえ、あなたたちに生きる、最後のチャンスを与えてくださる方がいます。」

「生きるチャンス？」

「死ななくてもいいのか!？」

四人の死刑囚は驚き、喜んでいる。しかし、

「静かにしてください。私が言っているのはチャンスです。確実に生き残れる保証はどこにもありません。」

「生き残る？それはどういうことだ？」

「あなたたちには鬼ごっこをしてもらいます。ルールは口頭で説明します。」

ルール

四人には発電機を5つ動かしてもらおう。

5つの発電機を動かすことができれば、脱出するためのゲートの電源が入る。

ゲートのレバーを引き、見事、そのエリアから脱出できれば脱出した人だけが死刑から逃れられる。

ただし、四人のほかに鬼がいるのでその鬼から逃げることに捕まった場合はその鬼に殺される。

「ルールは以上です。何か質問はありますか？」

「俺たちは発電機の動かし方なんて知らないぞ。」

「それについては大丈夫です。エリアに入れば頭の中に発電機の動かし方が入るといふことらしいので。」

「頭の中に入る？ いったいどういうことだ？」

「私もよくわかりませんが、おっと、もう始まるみたいですよ。」

「「「え？」」」

突如、部屋の中に霧が発生した。

霧は四人の死刑囚を飲み込むと、死刑囚ごと消え去った。

「では、あとは任せましたよ。」

「はあはあはあ!?!」

なんだよ。なんなんだよ!

死刑囚のうちの一人である男は、恐怖にふるえている。

霧に飲まれた四人は謎の農場のような場所に連れてこられていた。

最初は動揺していたが、係官の話しを思い出し、発電機を探すこと

をほかの三人に提案するが、

「夢だよな？」

「あの場所から逃げ出せたんだ！」

「死ななくてすむ。」

話に聞く耳を持たず、大声でこのようなことを言っていた。

そのとき、三人のうちの一人の男の後ろにウサギのお面をかぶった大柄の女性が斧を構えて立っていた。

俺はとっさに

「逃げろ！」

そう忠告したが、

「え？」

斧で背中を斬られ、その場に倒れ伏した。

倒れ伏した男は這いずって逃げようとしていたが、大柄の女に担ぎ上げられ、近くにあったフックに吊り下げられた。

俺たちはそのときにようやく気付いた。

『こいつが鬼だ』

一目散にばらばらに逃走し始めた。

だが、俺以外の二人が後ろから飛んできた斧に背中を刺され、地面に倒れ伏す。

二人も最初の奴と同じようにフックに吊り下げられた。

俺は物陰に隠れながら他の三人を助けようとフックに近づく。

最初に吊り下げられた男のもとに向かう。

吊り下げられた男は、蜘蛛の足のようなものに刺されないよう、抵抗している最中だ。

その様子に唾然としていた俺に、吊り下げられた男は、

「後ろだ！」

その言葉とともに蜘蛛の足に体を貫かれ、死んだ。

俺は後ろに誰かいると思い、前方に走り出す。

俺が元居た場所には投げ斧が地面に突き刺さっていた。

ここから俺と鬼との追いかけてこが始まった。

もう吊り下げられた二人を助けるなんてことは忘れ、俺だけでも助

かろうとしていた。

板があれば倒して時間を稼ぎ、障害物を使いながら撒こうとし、物陰に潜むことに。

物陰に潜むと、反対側で鬼が移動していた音が聞こえた。

俺は物音を立てないよう、息を押し殺す。

しばらくすると、鬼はどこかに行った。

息を整えた俺は、辺りに何かあるかを確認する。

確認しているとき、ヒュー、という音が聞こえた。

音の場所に静かに向う。

そこには地面に出口のようなものがあつた。

俺はフックに吊り下げられた男二人を思い出すが、

「お、俺だけでも生き残つてやる。」

こうして、三人を犠牲にし、自分だけ生き残ることにした男は脱出に成功した………ことはなく、

「いやだいやだいやだー！」

ハッチに入ろうとした男はその瞬間、鬼に捕まり、フックに吊り下げられる。

吊り下げられた男は逃げ出そうともがくが、最後には蜘蛛の足に貫かれ死んだ。

「お疲れさまでした。」

「…」

「今日の給金は口座のほうに振り込んでいます。」

「…ありがとうございます。」

「それでは、またお願いしますね。」

係官の男は笑顔で去っていった。

おそらく、自分の手で人を殺さなくてよかつたと思っっているのだろ

う。

「はあく何でこんなことになってるののでしょうか？」

私の名前は狩多^{かりた} 夜月^{よづき}、餓死して転生したあの女性です。

そんな私がなぜこんな仕事をしているかというところ、お金を稼がなくてはいけなくなり、知り合いの死刑を実行する係官の人に自分の能力を売り込みました。

「もう手を汚すのは嫌ですよ？なら、お金をもらう代わりに私が代わりにやりましょう。」

この係官の方は今の仕事に嫌気をさしていたが、どうしてもやめることができず、ストレスだけを抱えていた。

そのとき、私のこの言葉に食いつき、結果として、今の状況に落ち着いたというわけです。

でも、

「殺すことには慣れてはいませんが、もう少し、儀式に歯ごたえが欲しいですね。自分の腕を磨くためにはどうすればいいのでしょうか？」

そんなことを考えながら、家にたどり着いた私。

ふと、テーブルの上を見ると一通の手紙があった。

「これは？」

封筒を開け、中身を確認すると、

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界のすべてを捨て、

我らの『箱庭』に来られたし』

手紙を読んだ私はふわっとした感覚に襲われた。

「……え？」

下を見ると、地面と大きな湖がある。

下？

「おーちーてるー!？」

そのまま私は湖に落下していったのであった。

あつぷでーと

「おーちーてーるー!？」

落下しながら、助かる方法を探すため周りを見回すと、

お嬢様風の女の子、猫を抱えた女の子、金髪でヘッドホンを身につけた男の子と一緒に落下している。

どうするどうするどうする!？」

焦った私はあることを思いつく。

「その三人！私に捕まって！」

三人は私の服に掴まった。

『ナース』！」

体が黒い靄に覆われると、看護師のような白衣ではなく、汚れが付いた白衣に、頭には顔まで覆った白い布をかぶっている姿になった。

左手を握りこむ。その間に地面にどんどん近づいていく。

そして、手を開き、陸地に向かってブリリンク（瞬間移動）した。

ナースの固有能力はブリリンク、今、この状況においては最も適しているといってもいい能力だ。

この能力のおかげで湖？池？にダイブすることなく生き残ることができた。

私につかまっていた三人は陸地についたということに驚いていたが、その後、こんなことをした張本人に向かってだろう、罵詈雑言を吐き捨てていた。

はあく三人が落ち着くまでアドオンとかの確認でもしようかな。

頭の中に浮かんでいるパークの能力を確認し始めた私だったが、

「…い…おい、聞いているのか？」

私はその声に反応し、後ろを振り返ると、金髪少年が私に話しかけていた。

少年は私の今の姿に興味津々なのか、目を輝かせている。

しかし、少女二人は幽霊でも見たような目でこちらを見ている。

私は仕方なく、今の姿、『ナース』の姿を解除し、元の姿に戻す。

私の転生後の姿は、黒髪黒目の少女。

服装としては黒いワンピース……ワンピースといいましたが喪服です。

「さっきの姿のままでも俺は平気だったんだけどな。」

「後ろのあの子どもたちの目を見れば、すぐに元の姿に戻りますよ。」

金髪の少年は少女たちのほうを見る。

少女たちは物凄いですピードでうなずいている。

「ところで、私に何か用事でもありましたか？」

「今自己紹介をしてたつていっても聞いていなかったようだから改めて、俺の名前は逆廻十六夜、で、後ろの二人は」

「私の名前は久遠飛鳥よ。よろしくね。」

「…春日部耀。よろしく。」

金髪少年が十六夜さん、お嬢様風少女が飛鳥さん、猫を抱えている少女が耀さん。

「はい、覚えました。」

「で、あんたの名前は？」

「私は狩多夜月です。趣味は鬼ごっこ、よろしくお願いします。」
自己紹介も終わったので気になったことを三人に伝えることに、

「あの、そこにいる人に気付いていますか？」

「ああ気付いてるぜ。」

「あら、あなたも気づいていたのね。」

「風上に立たれたらいやでもわかる。」

全員の視線が茂みに向くと、ウサ耳を付けた女性が出てきました。

「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「…」

「あつは、取りつくシマもないですね！…あの、喪服のあなた様は

ど、どこを見ているのですか?」

私はウサ耳女性に近づくと、

「そのウサ耳は本物?」

「え、ええ、本物ですぎや!?!な、何を!?!」

私は我慢できずについウサ耳を握りしめてしまいました。
すると、

「へえ?このウサ耳って本物なのか?」

十六夜君がウサ耳をつかみ、飛鳥さん、耀さんも同じようにつかむ。
そこから時間がたち、

「あ、あのお、まだ満足してないのですか?」

「まだまだ、あと5時間くらい。」

「御三人様!この方を何とかしてください!」

私は三人がウサ耳から手を離れた後もモフモフを堪能していた。

「それもそうだな。いいかげんこの状況について説明してほしいからな。ほら、離してやれ。」

しゅしゅ、本当にしゅしゅウサ耳から手を離す。

「やっと放していただけました…ごほん!では、改めまして、ようこそ、箱庭の世界へ!」

そこからはウサ耳女性もとい黒ウサギによる箱庭の説明が始まった。

といってもおそらくですがこの説明は箱庭世界における本当に常識中の常識でしょう。

説明を聞いていると、私たちはどうやらこの黒ウサギの所属するコミュニティに所属することになっている気がするのですが…そこは追々考えましようか。

一通りの説明を終え、黒ウサギが所属するコミュニティに向かうことになったのですが、

「ちよっと、世界の果てを見てくるぜ!」

十六夜さんは黒ウサギに気づかれないよう音を立てず猛スピードでどこかに行ってしまった。

「十六夜さんだけどこかに行くのはずるいと思うので私もどこかに

行きます。」

私は十六夜さんとは別の方向に向かって歩き始める。

飛鳥さんと耀さんは特に何も言わずに黒ウサギについていくようです。

歩き始めて20分ほど経ったあたりで立ち止まった私は、

「先ほどから私のことをずっと見ている人がいるようですがどこのどちら様でしょうか。」

そういうと、木々の間から一羽のカラスが出てきました。

出てきたカラスは猛スピードで私に突撃したと思うと、霧状になり、私の体に入った。

「な、なんだったのでしょうか…うん？」

動揺しているのもつかの間、頭の中に様々な情報が流れ込んでくる。

内容は新キラー、新サイバーの能力、新しいステージの情報、そして、現実の世界に反映される能力の強化でした。

「これは能力のアップデートということでしょうか…」

とりあえず、視線の正体も分かり、能力のアップデートも行われ、私としては嬉しいことです。

気になることもなくなったので巨大な天幕に覆われている都市？に向かうことにします。

★★
★★

ようやく都市に到着した私は黒ウサギの言っていたギフトゲームに参加し、お菓子にお金、服といった勝ち取った景品を抱えながら徘徊している。

徘徊している最中、綺麗な並木道が目に入り、そこを歩いていると何かのお店の中に入っていく耀さんを見つけました。

「気になります。あのお店、すぐ気になります。『レイス』
建物の物陰に隠れながら能力を使い、『レイス』になる。
手に持っている鐘を叩くと、『レイス』の姿は一瞬にして消えた。」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

白夜叉によるギフトゲームに勝利した十六夜、飛鳥、耀は白夜叉からギフトカードと呼ばれるものをもらった。

十六夜のギフトネームが正体不明だったため白夜叉が動揺していたこと以外は特別なことは起きなかったのだが、

「あの、白夜叉様。」

「なんじゃ?」

「ギフトカードをもう一枚もらってもいいでしょうか?」

「なぜじゃ?」

黒ウサギは悲しそうな顔をし、

「実はもう一人、箱庭に訪れた方がいたのですがいなくなってしまう、その方のためのギフトカードをいただけないでしょうか。」

「そういうことであれば……ほれ、ギフトカードじゃ。」

「ありがとうございますー!」

黒ウサギは白夜叉からカードを受け取ったその瞬間、

カン コン

鐘のような音が聞こえると黒ウサギの後ろから手が現れ、ギフトカードを奪った。

「貴様、何者だ。」

白夜叉は警戒し、黒ウサギは後ろを恐る恐る振り返る。

黒ウサギの後ろにいたのは鐘と人間の頭蓋骨が付けられた武器を持っている不気味な大男だった。

急いで白夜叉たちのもとまで移動した黒ウサギは、警戒しながらも

男の様子をうかがう。

白夜叉が作り出したこの空間にどうやって侵入したのか。いつか
らいたのか。どうして誰も気づかなかったのかなどなど、疑問は尽き
ない。

白夜叉と黒ウサギは警戒しているのだが、なぜか十六夜たち三人は
何か話し合っている。

「どうする?」

「言ったほうがいいんじゃないかしら。」

「私も飛鳥に同意。」

話し合いが終わったのか、三人の中から十六夜が出てくる。そし
て、男に近づくと、

「狩多、いつからいたのか気づかなかったぜ。」

十六夜はにやりと笑い、そう言う。

その言葉を聞いた男の体が黒い霧に包まれる。

「よくわかりましたね。十六夜さん、飛鳥さん、耀さん。」

黒い霧が晴れた場所にいたのは喪服を着た少女、狩多夜月だった

「狩多さん!無事で何よりです!」

黒ウサギは狩多に抱き着きながらどこにいたのか、何をしていたの
かなど聞いている。

「黒ウサギ、もしやその者が先ほど言っていた者か?」

「はい!」

「ふむ…」

白夜叉は何かを考えているようだが、一度やめ、狩多に近づき、狩
多のギフトカードを奪いとり、ギフトを確認し始める。

そして、

「狩多といったか。もしこの者らに手を出すようなことがあれば何
があるうとも貴様を殺すぞ。」

とてつもない殺気を放ちながら狩多にそう言った白夜叉は、ギフト
カードを返し、黒ウサギたちを店から出した。

事情が分かっている黒ウサギたち4人は狩多に視線を向けるが、
「今は何も言えませんよ。私があなたたちを信用したその時にお話

します。」

それからは他愛ない話をしながらノーネームのコミュニティに向かう。

コミュニティにたどり着いた十六夜たちが目にしたものは荒廃した場所だった。

動物もいない、植物もない、建物も崩れ落ちている。

「どうやら前途多難なコミュニティになることになりましたね……」

狩多はそう言いながらも先に進んだ黒ウサギたちの後を追いつ、コミュニティの本拠に向かった。

ぎふとげーむ

コミュニケーションに到着した後は、

1. 子どもたちに私たち新メンバーの紹介
2. 貯水池に水樹の苗というものを設置
3. お風呂タイム

最後のお風呂タイムと行きたかったのですが別館のほうでしょうか？そのあたりからとてつもない大きな音が聞こえてきたので急いで向かう。

「十六夜さん、何か音が聞こえてきたのですがどうしたんですか？」
私は笑っている十六夜さんとうなだれているノーネームのコミュニケーションのリーダーであるジンくんに見かねる。

「いや、お客さんがいたからよ。そいつらに俺たちのコミュニケーションが対魔王のコミュニケーションだっていうことを教えてやっただけだ。」

「そうでしたか。これから忙しくなりそうですね。」

「おう。それじゃ俺は風呂に入ってくる。」

「私は部屋に戻りましょうか。お風呂はやることをやってからにしましょうか。ジンくんも部屋に戻ったほうがいいですよ。」

そういつて私はジンくんを置いて部屋に戻った。

部屋に戻ってきた私のやることは一つ、アップデートされた私の能力についての確認。

「さて、始めましょうか。」

部屋の明かりが突然消え、部屋全体がd b dのマッチを始める前の準備画面のような空間に変わった。

「今回新しく追加されたキラーは、ゴーストフェイス、デモゴルゴン、鬼、デススリンガーと、ん？準備中、エクセキューションナー…準備中はまだ使えないのね。よし、パークの確認です。」

そんなことをしている間に、外では別の問題が起こっていた。

★★

★★★★★★★★★★★★★★★★

「た、大変です！」

「ん？どうしたんだ、御チビ様。」

「ノーネームの年長組の内、二人が見当たらないんです！」

「…それは本当か？」

「はい。先ほど確認したのですが二人いなくなっていました。十六夜さん、手を貸してもらえないでしょうか。」

「そういうことなら手を貸す。ほかのやつらにも話はしたのか？」

「もうしていません。ですが、狩多さんの部屋だけが見えなくなっていました。」

「狩多には俺が伝えておく。御チビ様は探しに行ってください。」

「はい！」

十六夜は狩多の部屋があった場所に向かうが、そこには扉がなく、壁だけがあった。

「どうなってるやがるこれは。」

隣の空き部屋に入り、窓から入ろうとするが窓もなくなっていた。

「こうなったら壁をぶっ壊す！」

拳を握り締め、壁を殴るがびくともしない。何度も何度も殴るが壁には傷一つつかない。

「ちっ！こうなったら本気で殴るだけだ！」

十六夜は全力で拳を振りかぶり壁を殴ると、壁というより空間に罅が入り、少しだけ穴が開いた。

「おい！狩田！聞こえるなら今すぐそこから出てこい！」

そう呼びかけると、先ほどまであった罅が消え、部屋の外から扉が開く音が聞こえた。

十六夜は部屋から急いで出ていくと、そこには狩田の姿があった。

「なんででしょうか？」

「狩多。緊急事態だ。子供二人が消えた。」

「それは本当ですか？」

「ああ。俺も探しに向かう。狩田も探せよ。」

「分かっています。」

狩田にそう告げた十六夜はものすごいスピードで捜索に向かった。

★★

★★★★★★

「さてと、今日のキラーは『ゴーストフェイス』。」

私の体は霧に包まれる。そして、霧が晴れるとそこにいたのは白い不気味なお面を被り、真つ黒なフード付きのコートを身にまとった男がいた。

私はゴーストフェイスの体をの感覚を確認する。その時、突然ゴーストフェイスの固有パーク『地獄耳』が発動した。私は周囲を見回す。すると、赤いオーラが見えた。そのオーラは大柄な男の形をしている。

(見つけた。)

能力『闇の包容』を発動する。『闇の包容』は簡単に説明すると、心音が消え、殺人鬼の赤い光を隠す事ができるようになる固有能力だ。

赤いオーラが見えたのは森の中、私は音を立てず建物から出て、森の中に向かう。オーラが見えた位置には都合よく四人の男たちが行方が分からなくなっていた子供二人と一緒にいた。

「餓鬼二人を人質にとればあいつらはなにもできないはずだ。」

「裏切ったあいつらはどうする?」

「後で処分すればいい。そんなことより、この餓鬼どもを黙らせるのに時間がかかりすぎだ。傷だらけになっちまったじゃねえか。」

「す、すみません」

「まあいい。さっさといくぞ。」

子供二人はぼろぼろになっており、言葉を発することが難しいくらい傷だらけになっている。

(殺す)

そう思った瞬間、私の能力、ギフトが発動した。

「お、おい、この霧はいつたいなんだ!」

「わかりません!」

「くそっ! 大方名無しの誰かのギフトだろ! 霧から抜けるぞ!」

男四人は子供二人を担ぎ上げ走り出す。しかし、

「担いでた餓鬼どもはどこに行った…」

「し、しりません! それより、ここはどこですかね?」

霧を抜けた男たちがいた場所は先ほどとはまったく違う不気味な雰囲気のある薄暗い森の中、動揺する男たちの前に四枚の紙が落ちてきた。その紙はどす黒い血の色に染められ、端々がボロボロになっている。その紙に書かれていた内容は、

『ギフトゲーム名

エンティティの儀式

・プレイヤー一覧

愚かな生贄4人

・クリア条件

フィールドからの脱出

・クリア方法

発電機を5台修理し、出口であるゲート

からの脱出。または最後の1

人になり、ハッチからの脱出

・敗北条件

生贄4人の全滅

宣誓 上記を尊重し、邪神の名の下、ギフトゲームを開催します。

纏イ 纏ウ 纏? う 纏? う 印』

「な、なんだよこれ。俺たちはこんなギフトゲーム承諾してねえぞ！」

そんなことを言っていると、妙な音が聞こえたとき、全身に鳥肌が立った。そのとき、

ザシユツ!

何かに切り付けられた音が聞こえるとともに、男のうちの一人が地面に倒れた。

「なんなんだよ。なんなんだよ! てめえは!?!」

倒れた男の後ろにいたのは殺人鬼『ゴーストフェイス』、『ゴーストフェイス』はナイフの血を拭くと、一人、また一人と斬り付ける。斬り付けられた男は必ず地に伏せ、這いずることしかできなくなる。

「なんでそんなナイフ一つにおめえらは倒れてるんだ!?!」

『ゴーストフェイス』は最後に残った男も斬り付け、ダウンさせる。痛い痛いと感じる男たちを一人ずつ丁寧にフックにつるす。

「なんで、こんなことに!?!俺は!?!まだ生きるんだ!?!」

フックに三人の男をつるした『ゴーストフェイス』は残った最後の男もフックにつるす。つるされた男は絶叫する。『ゴーストフェイス』

ス』は満足したのかどこかに立ち去った。

最後にフックにつるされた男は生への渴望からかフックからの脱出を試みる。1回、2回、しかし、抜け出せない。3回目、なんと彼は抜け出すことに成功した。

男は走る、ここから抜け出すために全力で走る。だが、そんなことはできなかった。なぜなら、

「ひっ!?お、お前は!」

小屋を走り抜けようとしたとき、目の前に現れたのは『ゴーストフェイス』だった。

「いやだ、く、来るな!」

男は逆方向に走り始めるが、どんどん距離を詰められ、斬り付けられた。また男は地面に倒れた。だが、風が吹き抜けるような音が聞こえる。男は這った。全力で這った。音の聞こえる方向に向かう。そして、這った先にあつたのはハッチだった。

男は思った。ここから脱出できると、

そんな希望は無情にも消え去る。なぜなら、

「ま、待て!やめろ!」

バタン!

ハッチは男の目の前で閉じられたからだ。

『ゴーストフェイス』は男に近づき、背中に乗ると、ナイフを突き立てる。男は苦悶の声を上げ、最後に見たのは目の前の閉じられたハッチだった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

私は儀式を終了し、元の場所に帰ってきた。そこでは子ども二人の治療をしている黒ウサギと十六夜さんがいた。

突然現れた私に二人は驚いている。

「お前、狩多だよな?」

「狩田さん!?無事だったんですね!」

狩田に近づこうと黒ウサギは立ち上がるが十六夜さんがそれを止める。

「どうしたんですか？」

「黒ウサギ、あいつが何をしてきたのかわかるか？」

「なにをっておそらくですがこの子たちを連れ去った男四人を追い払ったんですよ？」

「いいや、違う。こいつは追い払ったんじゃない。殺したんだよ。」

「え？そ、そんなわけが…!?狩田さん、その血、いったい…」

私はギフトを解除する。

「十六夜さん、よくわかりましたね。もしかすると、私の血かもしれないのに彼らを殺したという真実にたどり着くのが早すぎではありませんか？」

「否定はしないんだな？」

「もちろんしませんよ。ただ、私のギフトゲームに彼らを参加させて、彼らはクリアできずに死んだだけですよ。」

「ちっ…狩田、お前のギフトやお前のこと後で聞かせてもらおうぜ。」

「…まあいいでしょう。それでは、私はお風呂に入ってきてますね。」

私はこの嫌な空気に耐え切れず、問題を後回しにしたのだった。